

中国で足利を考える

—足利商工会議所第1回中国経済視察団に参加して—

開倫塾

塾長 林 明夫

1. 「砕啄同時（さいたくどうじ）」

「いささか唐突ですが、「砕啄同時」という言葉があります。親鳥の体で温められた卵が雛となり、雛は卵の殻を「砕」いて外に出ていこうとするのですが、自分の力だけでは、殻は破れません。この時を親鳥は本能的に見計らって殻を「啄」き、そうして雛は殻から出て外を自由に動き回れるのです。殻の内側から働く「砕」のエネルギーと外側から働く「啄」のエネルギーが同時に作用し、そうして雛が誕生するというわけです。今日の西太平洋にみなぎる活力は、西太平洋諸国が長らく蓄積してきた開発へのエネルギーが、ある一定量に達した時、ちょうどその時に、日本の円高のインパクトが与えられて、その活力が一挙に溢れだしたものだ、つまり「砕啄同時」だというふうに私には見えるのです。」

＊ 1994年4月28日東洋経済新報社刊、渡辺利夫著「アジア経済読本」324ページより引用。

この何年か「開発経済学」の勉強をしていると、いろいろな興味のつきない「ことば」に出会う。今回はじめに引用させていただいた「砕啄同時」などはその典型である。以前東京都清瀬市の「ベスト自修館」の末松茂先生から「教育の基本は、砕啄同時ですよ。子どもたちが一所懸命勉強して実力がかなりそなわったときに、教え手が子どもの方向を誤らないように、少し手助けをしてあげるのが教育というものなのです。タイミングが大事で余り早い時期からいろいろなことを教えすぎてもいけないし、肝心なときに肝心なことを教えそこなうのもいけない。絶妙のタイミングで、その子にその時期に最も必要なことを教えることこそが教師の仕事のすべてではないのですか」と巖華園で何人かの先生方と泊まりがけの勉強会のときに教えられたのを思い出す。一国の経済の成長も、子どもの成長も同じ考えでとらえることができるというのも興味深い。

2. 「黒猫白猫論」

「白いネコでも、黒いネコでもネズミをとるのがいいネコだ。」「社会主義の本質は、最終的にみんなが豊かになることじゃあないのか。証券、株式市場、こういったものが、いったい、いいものなのか悪いものなのか、危険があるのかどうか、資本主義特有のものなのか、社会主義でも使えるのかどうか、断固、試してみるべきだ。……何を恐れているんだ。社会主義が資本主義より優勢になるには、人類社会が創造したすべての文明的な成果を大胆に吸収し、参考にし、資本主義の先進国を含め、現代社会の先進的な生産の経営方式や管理方法を吸収し、参考にしなくちゃいかん。」これは、中国の最高実力者鄧小平氏が92年の春節に深川、珠海などの華南沿海部を訪門したときの発言をまとめた、中国共産党極秘最高指示文書「中共中央分件二号」いわゆる同氏の南方講話からの抜粋である。「白猫黒猫論」で知られる鄧小平氏の、ここに表出されるプログマティズム(現実主義)が改革派を大いに勇気づけた。」

＊ 1993年3月15日日本評価論社刊、波辺利夫・白砂提津耶著「図説中国経済」138ページより引用。

「白いネコでも黒いネコでもネズミをとるネコはみんないいネコ」という鄧小平の言葉は、日本で

生活をするわれわれにも限りない勇気と希望を与えてくれる。「自助努力」「自己責任の原則」のもとに、勉強をする学生は、自分の勉強を全うするために全力を傾ける姿は美しい。企業も、最終的には消費者と株主の利益と従業員の幸せのために、創意工夫をこらし、全力を傾けることが大切だ。一所懸命に勉強や仕事をし、ある一定の成果を出した人は大いにたたえることも、あたりまえのようだが大切だ。十分な勉強や仕事もしていないのに、遊ぶことばかり覚え、「マージャン、カラオケ、ゴルフ、ゲーム」などにうつつをぬかしている会社の経営者を見ることが多いが、一体何を考えているのだろうと思う。食うや食わずの極貧状態から、ようやく食べるものが毎日手に入るようになり、仕事も少しずつではあるが難しいものをするようになって有難いとこれからの生活に希望をもやせるようになった中国の人々から教えられることは多い。人口 12 億ともいわれる国が、いろいろな経緯はあったろうけれども、一人の指導者の「白いネコでも黒いネコでもネズミをとるネコはよいネコ」という象徴的な表現を契機に国を運営する考え方を根本的に変え、一人一人の国民の口に食べ物が行き渡り、一人一人の国民が夜安心して休める少し広めの家屋を提供することをまずは目標にすえたことは感銘深い。一人の政治家の勉強の成果が、国民の生活を大幅によくすることも悪くすることもある。

＊この何年間に、韓国、フィリピン、タイ、インドネシア、マレーシア、シンガポール、中国、ベトナム、カンボジアと正式な視察団の一員として視察を続けさせて頂いたが、最も感じることは、「政治の安定」と、「軍事費へでなく産業育成と識字率向上への限られた国家予算の再配分」の重要性であった。（「開発独裁」の名のもとに政治的安定を直接的に手取り早く実現するために反体制派を戒厳令をひき抑圧することは非常に問題があるが：…。）

3. 中国で足利を考える

①上海の第一百貨店(日本の三越・ロンドンのハロッズのようなもの)では 300 円の Y シャツ、150 円のブラジャーが売られていた。日本人向けの絹のパジャマは 400 円の工場出荷価額。スイカは 1 個 2 円、コメは 1 kg 10 円から 20 円。

足利市で製造業や農業を営んでいる人は、自分が現在足利市でつくっているものが、中国ではどのような形でいくらぐらいでつくられているかを見に行く必要がある。そしてあと何年で、日本の水準に追いつかれるかを半年に一度位ずつ訪問して正確に予測する必要がある。（中国に限らず、今足利市でつくられているものがもし外国で足利よりも安くつくられているならば、その国の産地に出掛け、生産の実態を半年ごとに視察すべきです。この超円高で 1 ドルが 96 円台まできているのですから遊びの海外旅行などに行っている状況ではありません。うかうかしていると、余程の技術をもったところ以外は、すべて生産拠点が海外へシフトしてしまいます。足利市の製造業が大方なくなる可能性すらあります。もし、今やっている農業や製造業がここ数年で成り立たなくなると予測できるのなら、別の業態類型に転換をするか、海外に拠点を移すことを考える以外にありません。1990 年から 2010 年のあいだに埼玉県の人々は 44 %つまり 300 万人増加すると統計が出ていますので、住居は足利におきながら、埼玉県の人口急増地での「サービス」に自分の仕事を転換することも一つの考えです。この「みにむ」の出るころに足利市では花火大会が開催されますが、本当のことをいえば、花火大会どころではないのです。花火大会も大事ですが、もっと目をはっきりと見開いて、自分の会社の行く末を社会人は全力を傾けて考えるべきなのです。この危機的状況にもかかわらず、どうにかなるさとの楽観論の元、何の勉強もしないで会社の幹部職員、中堅社員であるにもかかわらず夕方になるとビールを飲んでいるようでは、5 年後どころか 3 年後すべての生産がなくなる危険性すらあります。

自分の会社は 95 円～ 105 円の円高にどれだけ耐えられるのかを、中国やベトナムをはじめとする国々では、どのような分野にこれから産業をシフトすると考えているのかを実地に定期的に見ながら、25 歳以上の中堅・幹部職員は仕事が終わって 3 ～ 4 時間は毎日徹底的に議論すべきであります。生き残るのはそのような会社だけであります。

②足利市役所職員をはじめとする公務員の皆さんも税収が 3 ～ 4 割減ったときにはどうするかをとことん今のうちから考えることが当然であろうと思います。

③ 65 歳以上の方は、病気になって医者にかからないようなるべく常日頃から好きなスポーツを見つけ、体力増強に励むこと。できればお金になるような仕事を捜し出し、終生現役を目指すことが大事かと思います。

④子供たちは、中国では小学 3 年生から週 4 時間も学校で英語を勉強していると聞きました。日本では中学 1 年から英語は習うと説明したら、「それじゃあおそすぎる。日本人が英語が話せない訳がわかった」とみんなから言われました。何十年前かのアメリカ人のようにこれからは、日本人は世界で仕事をしたり、生活したりしなければならなくなります。せめて小学 4 ～ 5 年から英語を勉強できるよう、足利市の小学校でも考えるべきだと思います。英語の先生は余るほどいます。足利再生のポイントは意外とこのへんにあるかもしれません。